保育おおさか

平成21年8月1日　第408号

大阪府社会福祉協議会・保育部会
（大阪府保育協議会）
☎ 06－6762－9001　Fax 06－6768－2426

子どもと子育てに関わりをもつ社会の実現をめざして

911名参加し活発な意見交換

―21年度近畿ブロック保育研究集会

平成21年度近畿ブロック保育研究集会（主催・近畿ブロック保育協議会、社団法人兵庫県保育協会）が7月16、17の両日、「すべての人が子どもと子育てに関わりをもつ社会の実現をめざして」をメーンテーマに911名が参加し、神戸市の神戸ポートピアホテルで開催。初日の行政報告、記念講演に続き2日目は各分科会（2面）が開かれ活発な意見交換が行われました。

900人超が参加した研究集会

行政報告

子育て支援の基盤が必要・保育の質の確保も

―厚労省の杉原氏

第1日目は、厚生労働省雇用均等・児童家庭局保育課長補佐の杉原広高氏の「保育行政の動向と課題」と題する行政報告が行われました。

杉原氏は待機児童状況が昨年度からさらに増加している現状に触れ、「新待機児童ゼロ作戦」の目標として、今後3年間を集中重点期間とし具体的取り組みを進めると強調。保育所の受け入れ児童数の拡大、地域における子育てしやすい環境整備のための「安心こども基金」の概要について説明されました。

また、少子化問題にも言及、働きたい女性が潜在的にある状況で、「就労」と「結婚・出産・子育て」の二者択一構造を変え、仕事と生活の調和と家庭における子育ての包括的支援の基盤が必要と指摘されました。

最後に杉原氏は、認定こども園制度やアクションプログラムに触れるとともに、保育に欠けるすべての子どもの健全な未来のために、保育の質の確保が重要であると結ばれました。

記念講演

親育ち支援を訴える

―高橋史郎教授

第2日目には、「子どもと親、共に育つ保育所づくり」と題して明星大学教授の高橋史郎氏が記念講演されました。

高橋氏はまず、子育て支援の一貫として親育ち支援が必要であると述べられました。

親育ち支援の必要性について、例えば授乳中、携帯を見る母親が増加しており、この行動によって子どもの愛着心・共感・自制心が育ちにくい、ということが問題点としてあげられました。

また、共感が育ちにくいということは、道徳観が乏しくなることでもあり、小学校に就学しても学級崩壊などにもつながってくるという。

幼児期にしっかりと甘えることで、自分の存在意義を確かめ、自尊感情が生まれる、このことにより子どもは自立するが、子どもの最善の利益の意味を取り違え、目先の利益や欲求を優先させている現状があると指摘されました。

親が親として、また、子どもが子どもらしく生きるために、保育者は肯定的言葉でもって保育を行ってほしいと強く訴えられました。

高橋史郎氏

ねこと

最近話題の「脳科学」。なかでも脳科学子育て育児法のカヨコおばあちゃんがなぜか気になります。

〝三つ子の魂百まで〟のことばどおり、生まれてから3歳までが重要であるということは多くの親も知っています。

でも、あのスーパーおばあちゃんが注目を浴びているのは何故でしょう？「声のかけ方、ものの見せ方、抱っこにおんぶ」、それに「いないないばあ」は保育士なら朝飯前です。

ただ、子どもの脳の発達がどうの、前頭連合野の働きがどうのとかをうまく保護者に伝えることは苦手です。神経伝達物質なんてとんでもない。

今、気になる子育ては、黙ったままの授乳や我慢ができない親のしつけなどです。だからこそ、日本古来の伝統的な育児法が見直されるようになったのでしょう。

そこに、「脳科学」とつけば誰もが興味をもつ理由があるのだと思います。保育も科学の力を身につけて、時代にあったアレンジが大切なのだと思います。

（編集委員Y・N）

近畿ブロック保育研究集会 分科会報告

第3分科会

テーマ「職場内研修の充実による職員の資質向上」

成果をあげる委員会制度や自己評価システムの導入

―三原台保育園の重谷氏

「職場内研修の充実による職員の資質向上（保育の質を高める自己評価の活かし方）」をテーマに244名が参加。

大阪府堺市の三原台保育園の重谷崇夫園長が同園の職場内研修活動について発表されました。

具体的には、「委員会制度の導入」と「自己評価システムの導入」の2点。

重谷氏は「委員会制度の導入」について、環境、広報、保健、プログラム、研究、QCの各小委員会を立ち上げ、一人ひとりが自立した人格者としてそれぞれの力を生かし、施設の向上に取り組んでいる状況を説明しました。

第3分科会

成果事例として、保育活動の自主的な活動展開、発展、経費削減の効率アップにつながっていること、園内における保育士のなぎなた指導が話題となり、地域の方々が参加するようになったことで、今では地域活動事業の一環として発展し、やりがいのある仕事づくりにつながっている例などを紹介されました。

また「自己評価システムの導入」については、「目標設定申告書」「自己評価表」の2種類の書類を作成し、自己研鑽するための資料として導入しているとされたうえ、職場のPDCAを通して職員間の共通項を増やし、職員、施設、法人の理想のずれを修正するために、職員と園長の話し合いによる意思疎通を図る大切さを強調された。

今後の展望として、厚生労働省が発表したガイドラインとのすり合わせを行い、さらに充実した研修活動につなげていきたいと抱負を述べられた。

引き続き兵庫県の塩屋保育園の岸本令子氏から保育園の職員としての役割や新任研修について発表がありました。

職員はそれぞれの立場と果たすべき役割を明確にし、問題点などの解決の糸口をみつけることを自己評価のねらいとしていること、新任研修では法人の理念・保育目標・指導目標を理解することを視野に入れ、「保育過程と指導計画」や「危機管理・リスクマネジメント」についても研修の中に取り入れていると説明。

助言者の神戸松蔭女子学院大学人間科学部教授の勝木洋子氏は、国の保育所における保育の質の向上のためのアクションプログラムについて解説、職場内研修の充実による職員の資質向上の要点について指摘されました。

（編集委員　T・S）

第4分科会

テーマ「子育て支援の拠点としての保育所の機能を考える」

地域支援は担当制で・ワークシェアリング導入も

―高屋保育園の山本氏

高屋保育園（大阪府）の山本佳世氏と京都市立壬生保育所（京都府）の福岡淳子氏が「子育て支援の拠点としての保育所の機能を考える」をテーマにそれぞれ発表されました。

山本氏は高屋保育園の状況について、支援センターや専任職員が特に設置されていない中で、いかに地域支援に関わるかを問題としてあげられ、その具体的な解決策として、まず在園児の保育を基本とし、園庭解放を午後から行うなど時間、場所などを考慮していると説明されました。

また、地域支援について職員の意識を高めるため、プログラム作成から実行まで、毎回担当制を導入し、その補助としてパート職員のワークシェアリングで対応していると述べられました。

その他にも子育て支援に参加されている地域の方々とコミュニケーションを深めるため、参加者カードを作成し、個人の把握に努めていると強調。

これからの課題として、情報発信の強化、地域との情報の共有化が不可欠と明言されました。

第4分科会の発表者

続いて福岡氏が壬生保育所では専任職員を置かれ、毎日の園庭解放、様々な子育て講座やヨガ教室などの文化講座を実施していると紹介されたほか、保育所の特徴を生かして育児不安を和らげるため、新しいパパ、ママのために乳児の育児体験を実施されているという。

また、親が主体となって計画する行事を取り入れ、親同士の連携強化につなげていることにも触れられました。

助言者の神戸常盤大学幼児教育学科准教授の小崎恭弘氏は子育て支援について、これからは老人などの後期社会保障だけでなく、子育てのための前期社会保障が重要であることに言及。「今後5年間の子育て行動計画に現場からの声をより一層あげていく必要がある。

また、社会に子育ては重要であるという認識を浸透させ『子育て文化』の構築を保育園が担っていかなければならない」と結ばれました。

（編集委員　H・M）

保育園をたずねて 386

豊中市　とうほう保育所

音楽発表会など年中行事は幼保合同で 幼年消防クラブで防火の心得を学ぶ

音楽発表会

とうほう保育所は阪急宝塚線、豊中駅から徒歩10分の閑静な住宅街の中にあります。

幼保連携でのびのび一人ひとりの個性を伸ばしたいと、学校法人東邦幼稚園が母体となり、昭和54年に豊中市委託保育所として設立されました。

平成15年に認可保育所となり、今年度で創立30周年を迎えました。定員は30名で、現在は、0歳児～5歳児まで33名が在所しています。

創立当初から、月に一度の誕生日会・音楽発表会・運動会・おもちつきなどの年中行事を幼稚園と合同で行っています。

5歳児は、就学前の集団生活に慣れ親しむために、保育所に登所してから幼稚園の年長組に在籍し、幼稚園が終わると保育所に戻って過ごしています。

0歳児～4歳児も異年齢で一緒に過ごす機会が多く設けられているので、異年齢の助け合いなど微笑ましい子どものようすをたくさん見ることができます。

最近では、幼稚園と合同の音楽発表会がありました。保育所の0歳児～4歳児の子どもたちが力をあわせてオペレッタ「バルバルさん」を演じました。

毎年恒例となっている豊中市の幼年消防クラブスポーツ大会では、バケツリレーや玉入れなどの競技を楽しんだり、子どもたちの大好きな消防自動車との綱引きをしたり。そんな中で「火の用心」・「防火の心得」を学びます。子どもたちには大興奮の一日だったようです。

消防車と綱引き

石橋園長先生は「子どもたちが大きくなった時に、保育所での生活が一番楽しかったよ！と思いだしてもらえるように、日々子どもたちと一緒に楽しく保育にあたっています」と優しい眼差しで話されました。

（編集委員　M・H）

寝屋川市　かえで保育園

Tシャツ作りや編み物も 楽しい体験積み重ね表現意欲育てる

色を付けるぞ！

寝屋川市の公立民営化保育園として、2年目を迎えた「かえで保育園」。「開園まだ一年」と思われるかもしれませんが、同園の法人は、徒歩数分の場所に設立三十年を迎える「神田（かみだ）保育園」を運営されています。ここでの経験と既存園の良いところをうまく織り交ぜながら、ほぼ同じ地域の中で新たなスタートを切りました。

保育目標に掲げられているのは―

一、明るく元気でたくましい子ども

二、思いやりの心を持ち、仲間を大切にする子ども

三、自分で考えものおじせず行動できる子ども

園を訪問して特に気付いたのは日本の伝統に親しむ姿勢です。その例を二つ紹介します。

一つは、お泊まり保育で着る草木染めTシャツ作りです。姉妹園と共同運営されている近くの「わくわく農園」で作った玉ねぎを収穫。皮の部分を煮て染料にし、子どもたちは自分自身のオリジナルのTシャツを作ります。食する部分は夕食で園児たちの手作りカレーの具になります。食材一つで多くの体験ができるように工夫をされていました。染色ではほかに「鯉のぼり」も作られています。

手作りの鯉が園庭で泳ぐとは、なんとも羨ましい限りです。

二つ目は、裁縫や編み物を遊びの中に取り入れていることです。園児たちは、リリアンや小さな木製の織り機で一生懸命に編み物や織物をしているそうです。

5歳児では「針」も扱います。茶色の布で「おいなりさん」を作り、仕上がると「布」が「みんなのおもちゃ」に変わります。楽しいと思うことを積み重ねることが表現への意欲を育てるのだと思います。

（編集委員　J・F）

できた！

保育園をたずねて 387

東大阪市　たいよう保育園

同一法人の隣接高齢者施設と世代間交流
斬新な散歩計画や保護者の保育体験も

園舎には大きな窓

平成17年4月開園の「たいよう保育園」は5年目を迎えられたばかり。

隣接して同一法人の「高齢者ケアセンター向日葵」があり、世代間の交流を兼ね備えた地域交流・地域支援型の保育園です。

メルヘンチックな雰囲気の園舎の中は、ぬくもりを感じさせる木をふんだんに使い、園名通りの太陽のように明るくて広々としています。訪ねた日は七夕の行事があり、遊戯室から園庭に広がるウッドテラスに大きな笹飾りが飾ってありました。

「健康でのびのび明るい子」「がまんのできる子」「あいさつのできる子」が保育の中心。

新設園ならではの斬新な取り組みが目を引きますが、その中の「散歩計画」は、年齢別行動計画に基づき、発達段階に応じ目的を定めるなどしっかりとした形に表れるよう実践。廊下を挟んで往来できる「高齢者ケアセンター向日葵」へは敬老週間や不定期の訪問交流を実施、やさしさや思いやりを育てる保育にもつながっているようです。

もう一つ、「保護者に対する支援」の具体策として「保育参加（体験）」が6月に行われました。衣服の着脱補助や絵本の読み聞かせなど保護者が保育士体験し、子どもへの愛着や周囲への感謝の気持ちが生まれる貴重なひと時になったようです。

最近、特に気にかけておられるのは親としての責任や態度だそうですが、親に注文する前に、まず職員の質の向上を目指すことが重要、と副園長先生は職員心得八ヵ条を挙げながら強調されました。

保育士自ら規律正しく保護者に接することを心がけ、法人のシンボルマークである三つの「輪」（地域社会、利用者、施設）と人の「和」を柱とされている保育園です。

（編集委員　Y・N）

松原市　松原保育園

人との繋がり大切に、子どもの社交性を育む
園舎は稲穂に囲まれ海原に浮かぶ船のよう

朝夕出迎える園長先生

平成17年7月に開園した松原保育園は松原市にあります。

園の周りは南側を走る道路を除いて、東西北面すべてに田んぼが広がっています。園舎はその田んぼの南側へそびえたち、北側へ向いた形で2階建て。定員数は90名です。

この時季、稲の穂が青々と茂っています。たまたま訪れた日はとても風が強く、稲穂が一気に揺れると、園舎はまるでみどりの大海原に浮かぶ船のようでした。

開園当初、職員たちはまず、地域のみなさんが田んぼを大切にされているということの理解を深める働きかけをされたそうです。園長先生、職員全員で日々の挨拶や付近の清掃も根気強く続けられ、ついに昨年の秋その成果が実を結び地域の方が園児たちに田んぼの一部でジャガイモ堀をさせてくださったり、米もいただくようになりました。

保育では、週3回まで利用可能な一時保育、月64時間以上96時間まで利用可能な特定保育を実施。主に0から2歳児で10名の定員はほぼ満杯。一時利用の子どもも、クラスの子どもと一緒に過ごすことで多くの子どもと関わることができ、また、クラスの子どもたちも毎日のように新しい友だちが増えることで人と人との繋がりや社交性が育まれることを目標とされています。クラスの保育士は大変でしょうが、保育士のみなさんも子どもへの対応能力が充実してきたことを実感されているようです。

今では、園の誕生日（設立日）が近づくと、保護者と保育士が一緒に大掃除をすることが定着してきているそうです。

また、園にある菜園には、おじいちゃん、おばあちゃん世代の方々が訪れて世話をされています。子どもたちも大喜びで、おじいちゃんやおばあちゃんと一緒になって植物の成長や収穫を楽しんでいるということです。

4度目の誕生日を迎えた松原保育園は、職員と地域や保護者の方々が一丸となって順風満帆です。

（編集委員　N・M）

保育のまど 36

座談会

シリーズ 地域交流・地域連携

多様なニーズに対応、スマイルサポーター（地域貢献支援員）の活動にも期待

「保育のまど」は6回にわたり「地域交流・地域連携」をテーマに連載しました。その総括編として本紙編集委員による座談会を開催。核家族化に伴う多様なニーズに対応し保育園が果たすべき役割などについて活発な意見が交換されました。主な内容は次の通り。（司会・齊藤和正編集委員長）

齊藤和正編集委員長

地域での見守り欠かせない交流・連携

司会　これまで「保育のまど」にご登場いただいたそれぞれの保育園の地域交流・地域連携の活動を通して、様々な取り組みが行われていることがわかりました。

A　ある園では、清掃活動を通して地域の方々と園児たちが交流し、挨拶を交わすようになった事例がありました。地域交流・地域連携のはじまりは、このような挨拶は欠かせない大切なことではないでしょうか。

B　ここ10年～20年の間でインターネット、携帯電話やコンビニエンスストアの普及により社会における様々なサービスが充実しました。また、核家族化も進むにつれ、社会福祉サービスも多様化した結果、地域における交流も減ったように感じます。

C　核家族が増えている中で、子育てを知らない世代の親が子育てに取り組むことも多くなっている。地域での見守りを必要とする家族も少なくありません。保育園から保育士が地域の子育てサロンなどに出向くことで、実際にその必要性を感じることもあります。

D　児童虐待が疑われる母子家庭が地域に存在した場合、時間によっては保育園での対応や専門機関への連絡が難しいときもある。地域での見守りを考えると、保育園や民生委員・児童委員、地域の方々との交流がなければ難しい。そのためにもやはり、地域交流や地域連携は必要だと考えます。

E　保育園から地域に出向いて行くこと、また園庭開放など地域の方を保育園に呼び込むことは、保育園のPRにもなるし、地域の方からは、保育園の敷居が低くなったとの声も聞きますね。

小中高、老人福祉施設と幅広い世代間交流も

F　昨今、児童虐待がニュースなどで取り上げられ、実際に気になる家庭が地域に存在することもあります。ただ場合によっては保育園も専門機関との連携なくしては解決できない問題も少なくないですね。

G　命の大切さを学ぶために小中高の生徒たちが当園に訪れます。園児たちと関わることで思いやりを培っているようです。保育園は地域の学校などと連携することで、幅広い交流のできる施設だと考えます。

H　当園でも民生委員からのお誘いで子育てサロンに参加しています。実際に保育士がその専門性を生かし、子育てに悩む保護者の相談を受けることもあります。

司会　連載でも取り上げられていたように、老人ホームに園児たちが訪問し、世代間交流の機会を設けるなどの活動があります。それぞれが地域における役割を見出し、地域との連携や交流に取り組んでいる姿を垣間見ることができますね。

地域との関わり希薄な親子への働きかけ

I　各保育園で地域交流・地域連携の様々な取り組みをされていることは連載を振り返っても知ることができますが、実際、地域には家にひきこもってしまい、地域との関わりが希薄な親子も少なくないと思います。そのような親子に対してどのような働きかけができるか。保育園として担える役割なのではないでしょうか。

A　人と人との繋がりが希薄になっている一方で、母子家庭や父子家庭も増加傾向にありますね。育児ストレスや子育てを初めて経験する保護者など、その様々な背景からニーズが多様化している。それに対しどのように関わりをもってサポートすることができるのか、今後期待される取り組みの一つだと考えます。

F　専門機関や地域とのつながりを作ることで、家にひきこもってしまいがちな親子について、保育園だけでは把握することが難しい情報を得ることができると考えます。

G　「地域交流・地域連携」の取り組みは、挨拶ひとつを例に挙げてもわかるように、実は普段の保育活動の中で実践していることが多いんですね。そのことに改めて気づかされることだけでも、これからの取り組みに対して新たな視点が見出せるのではないでしょうか。

司会　ニーズが多様化していることを考えると、保育士の専門性と併せて、スマイルサポーター（地域貢献支援員）のこれからの養成や活動に期待し、積極的にPRも行っていきたいと考えています。ありがとうございました。

（事務局）

座談会の風景

意見交換する編集委員のみなさん

ブロックだより

北摂

加盟園130ケ園超える・各市園長会通じ組織強化へ

―新体制

北摂ブロック保育部会の会長にこのたび、旭ヶ丘学園の武内慎吾園長が就任されました。

以下は武内会長から今後の北摂ブロック新体制について述べていただきました。

現在、保育の世界は「新たな保育制度問題」について、今までの保育制度とは大きく違った形になろうとしています。これまで以上に大きな問題に向き合い、選択を迫られる場面も多い時代となりますが、そのときこそ保育への思いを、基本に立ち返って見直し、子どもたちのため、地域のためを第一に考え行動していかなければならないと考えています。

今年度から北摂ブロックでは、各市から副会長を選出することになりました。平成21年4月現在、加盟園は130ヵ園を超え、いろいろな意味で大きな変革期であることから、情報を素早く伝達することの重要性を考え、各市の園長会を通じ組織の強化を図りたいと考えています。

永野保育部会長はじめ諸先輩は、大阪の保育は日本一だとおっしゃっておられますが、私もその通りだと自負しています。そのプライドあるDNAを持てることに感謝し、北摂ブロック、保育部会の発展、保育事業の向上のため、粉骨砕身努めてまいります。

（旭ヶ丘学園　S・T）

「旬」

遊び場にヨシズ掛け　テントで涼味演出　“こうこ”の佃煮「大名煮」、夏祭りはおでん作り

夏は土用の頃が一番暑いと言われるが、近年の熱帯夜はクーラー無しでは寝られない。炎天下の子どもたちの遊び場確保に10年前頃から施設機能強化費を利用し、2x3間のテントを数張購入。シートに代えヨシズをかけ影をつくっています。ヨシズは天然素材、中空で熱と光を遮りそれなりの快適さを与えてくれる。今年も3基立て、プールを挟み上に長い竹棒にヨシズを乗せ、役所からのご指導に従い直射日光を遮り、保育士からも好評だ。

ヨシズだけでは垂れてくるので特製（勿論自家製）金具・パイプを間に受けて張る。風が抜けるので、台風には脚を折りたたんで大丈夫。

夏野菜もトマト・きゅうりはぼちぼち終り。今年は2歳児にピーマンを大鉢で挑戦させたところ大いに関心をもち、毎日の水やりも如雨露の取り合いに。食育の面からも上々とほくそ笑んでいます。小さな畑だが、野菜を抜いて添え木の片付け、石灰を撒いて耕しも、園長の仕事、ああ腰が痛い！

お盆を迎えると、デラウエア（大阪ぶどう）の収穫を迎える。余りに沢山実り袋かけが大変なので、数年前から保護者に子どもの名前を書いた袋を渡し、風で飛んだら権利無しとしたら、保育士にやらせるのとは大違いで殆ど飛ばない。仕事で、しかも初めてやるのと、自分の子どものモノとする親の気持ちはさすが。

暑い時は食欲が落ち、あっさりしたモノが好み。旬の水ナスを石の重しで塩漬け、発酵し色が黄色くなるほど。塩出しをして土生姜で。極めつけは昨年冬に漬けた「こうこ」（大根糠漬け）の佃煮。煮干だし・酒・濃口醤油・タカノツメで。佃煮は味が馴染むのに1週間は寝かせて、これは最高だ。

京都・錦市場で「ぜいたく煮」として売っていたが、対照にはならない。

通いの店の常連客が名づけてくれた「大名煮」とつけ、店の大将も絶賛の品、「先生、これ売れるで」

また、8月は地域の夏祭りに保育園として出店。自慢のおでんは、鍋やタッパーを持って買いに来る常連客もつき、そんな方々には「おまけ入れときや！」金魚すくい、お好み焼き、牛スジカレーも売り切れ続出。

卒園児やその親たちとも再会できる地域交流の取組みを今年も職員たちとともに頑張ります。

（H・N）

南大阪

22ケ園、560人の年長児参加し交流深める

―恒例の大運動会

色とりどりの玉を投げる子どもたち

恒例の大運動会が6月24日（水）、22ヵ園、総数560名余りの年長児が参加して開催されました。

玉入れ、綱引きなど多くの種目がありますが、やはり会場全体が盛り上がったのは各園代表による園対抗リレー。予戦、準決勝、決勝と進むにつれ、園児たちはもちろん保育士、観覧の保護者もヒートアップ、声援とも叫びともつかぬどよめきが会場に響き渡りました。

負けて悔し涙の園児の姿を見ると少し切なくなりますが、一つの経験と捉え今後の成長の糧にしてもらいたいものです。

最後は「じゃんけん列車」から大きな輪になりフォークダンスを繰り広げました。和やかな雰囲気のなか、他園の園児たちと交流を深めました。

閉会式では「じゃんけん列車」で最後に残った3名とリレーの1位から4位までの園が表彰され、大きなケガもなく無事終了しました。子どもたちにも保育園生活のよい思い出になるのでは。

大会の理念である「多くのお友だちとの交流」を忘れず、これからも子どもたちのためのより良い大会にしたいと思います。（編集委員　H・M）

発行所
大阪市中央区中寺1丁目1－54
大阪府社会福祉協議会
保育部会
大阪府保育協議会
TEL (06) 6762－9001
発行人
永野治男
編集人
齊藤和正